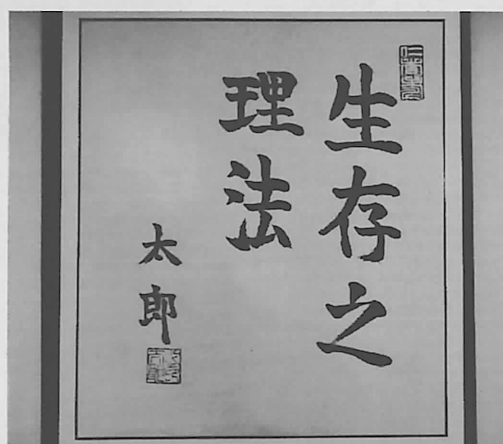


生存科学研究

ニュース

Vol.5. No.6.

1990. 11.10発行



内 容

- 第53回生存科学研究会
人類生存の方法論としての『環境倫理学』
.....加藤尚武... 1
- 第5回北上川プロジェクト準備会..... 2
- 第1回家庭問題研究会..... 3
- 第1回医薬問題研究会..... 3
- 第2回メディコエコノミックス研究会..... 4
- 生存科学研究所福岡講演会
「激変する産業社会と地域・住民の健康政策」... 5
- 第4回武見国際保健シンポジウムを終わって... 6
- 武見フェローのポストン便り(第1報)..... 6
- ハーバード大学武見講座活動報告..... 9
- 平成2年度第1回総合調整委員会..... 9
- 第1回生存科学研究所シンポジウム
「生存科学における発展」予報10
- 第54回生存科学研究会のお知らせ.....10
- 生存科学研究ニュース配布についてのお知らせ11
- お詫びと訂正のお願い.....11
- 維持会員だより(会員異動).....11
- 研究所日報.....11

発行：生存科学研究会

〒104 東京都中央区銀座4-5-1

聖書館ビル303

(財)生存科学研究所内

電話 03-563-3518

●第53回生存科学研究会

人類生存の方法論としての『環境倫理学』

千葉大学文学部教授 加藤尚武

9月22日(土)午後2時より、経団連会館において第53回生存科学研究会が開催された。今回の講師は千葉大学文学部の加藤尚武教授。教授は哲学専攻で、ヘーゲル哲学や情報に関わる哲学を専門とされており、バイオエシックスを早くから研究されている。

前回の講師江見康一教授が日本生命倫理学会での活動を通し知り合われ、そのご紹介で今回講演していただくことになった。

加藤教授の講演の概要は以下のとおり。

* * * *

生命倫理(バイオエシックス)には膨大な文献があり、研究が進んでいるが、環境倫理学は文献も専門家も少なく、未発達分野である。

環境倫理学には3つの主張がある。

(1) 権利のアミニズム的拡大

権利の概念を人間のみならず、動植物にまで拡大した。

(2) 世代間倫理

これまでの合意は同世代間のものであり、現世代の未来世代に対するエゴイズムはチェックできない。それにたいし世代間倫理を主張する。

(3) 地球全体主義

これまで個人と国家の利益の主張であり、その両者間の優劣の議論であった。それに対し地球全体の利益を優先すべきであると主張する。

これ等が、これまでの自由主義・個人主義と折り合えるのか。両立可能なのかとの議論が出てくる。

生命倫理は自由主義・個人主義の倫理を純粹化したもので、その要点は「生命と身体とを含めて自分の所有に帰するものは、他者への危害を引き起こさない限りで、たとえその決定の内容が理性的に見て愚行と見なされようとも、対応能力をもつ成人の自己決定に委ねられるべきである。」と考える。

環境倫理では環境問題は即人口問題である。生命倫理では、人口妊娠中絶の政府強制は、自己決定に委ねられていないからとして認められず、環境倫理の主張と対立する。

生命倫理学は生存権の縮小の方向に向かう。人口妊娠中絶や、重度心身障害児の安楽死、末期癌の安楽死、脳死と臓器移植等、それを認める考え方を作ったのは、人格的交流の可能性を持ったところに生存権を認めるという生命倫理である。この生存権は本来の生存権であり、権利と義務をもつ。これだけでは社会は維持できないので、その両側に拡張された、権利のみで義務を欠く保護的な、二次的生存権を認めるが、それは本来の生存権を持つ人がその存否を決定しても良いと考える。

自由主義では自己決定が第1位で、理性的決定が第2位、功利的決定が第3位である。環境倫理はこれと対立する。“他者への危害を及ぼさない限り”というが、現在の認識のように環境が限定され、開放系から閉鎖系へと移行すれば、全ての行為が他への利害関係を含むことになる。そのため全てに公の規制を及ぼし得るということになり、自由主義と原理的に両立し得ない。この両立を計るためには、他者への危害を共同のファウンドで補

うような人工的な新しいシステムを作る必要がある。

今までの倫理は相互性の倫理であったが、それは今行き詰まった。地球の有限性に行きあたり、これまでの「希望」の原理が「責任」の原理に変わる。封建時代にも見られた時間の縦軸の発想が必要となる。未来世代の生存権を保障するためには埋蔵資源は使ってはならないことになり、あらゆる資源は循環的に使われなければならない。そうなれば太陽エネルギーしか使えず、12世紀の人口レベルに戻らねばならなくなる。資源枯渇より環境問題のほうが先に逼迫する。こうして環境倫理は生命倫理より更に重大な考え方の変換を強要する。

我々は環境倫理と自由主義（生命倫理）の両立を探らねばならない。進歩という考え方は危険である。如何に未来の世代が優れていても、処理できないという限界がある。自然主義と人間主義とは接近してきた。自分の「所有」の範囲を社会に認められる範囲としていくことで、自由が保障されていくのではなからうか。技術によってではなく、技術を使用する倫理によって生存の可能性が保障されるのではなからうか。

* * * *

講演の後、出席者全員による活発な討論が行われた。

“ポッターの提唱したバイオエシックスは、生命倫理も環境倫理も包含したものではなかったか”という質問もでたが、生存科学は両方を始めから包括的に考える立場であると考えられる。生存科学のように両者を包括的に考える方法と、今回の講師のように別々に考えその両立を計る方法と両方ありうるであろうが、今回の講師のように別々に考えることは、夫々の立場と問題点を理解し易くするという意味で大変有意義であろう。



第5回北上川プロジェクト準備会

8月18日(土)に開催された第5回北上川プロジェクト準備会には、前回から参加された橋本五郎氏、溝田博史氏に加えて、新に財団法人「森とむらの会」から副会長上飯坂実氏、専務理事杉本一氏、理事石川英夫氏の諸氏が出席。

まず石川氏から世界の農業政策の現状を、

特にECのそれを中心に、また、スイスにおける環境維持と国土計画について以下の概要のような説明がなされた。

日本の農業の衰退は経済全体のバランスから問題があり、パラダイムの転換が必要であるという経済学者もいる。ECでは農業統合化、流通合理化の動きは1970年代から見ら

れ、条件不利地域へ財政援助が始められている。1985年のGreen Report以後、大規模農業による生産の増加から、小規模農業による環境管理の有効性を再評価する政策に転換が始まり、単に食料の生産面だけでなく、農業・農村の持つ多面的機能の開発を考え、農村を美しく保全すれば国民に有益であるという考え方にたって資金を出すということが試みられている。スイスではECより早く、家族小農を対象として財政補助を行っている。地域からの積み上げ方式により環境維持の強いコンセンサスが生まれ、自然の美しい景観を造りあげている。

石川氏の説明の後、景観の評価基準の問題、環境政策と農業政策の繋がりが必要、日本とスイスのリゾート開発の姿勢の差、公共事業でできるものと住民ができることについて等々の議論がなされ、また、今回の準備会は現地岩手県で行うこと、本年度中に本委員会を開催できるようにしたいということが決まった。

この決定に従い第6回準備会は現地田嶋達郎先生のきもいりにより岩手県（盛岡市）で現地の方々をまじえ、10月14日(日)に開催された。

第1回家庭問題研究会

8月30日(木)午後6時より、第1回家庭問題研究会が開催された。この研究会は昨年度の「健康の最小単位としての家庭」研究分科会から発展的に改組され、財団の研究委員会となったものである。

第1回は、この研究会の今後の研究目標につき討議。まず過日市原市の委託を受けて研究所が作成した市原市「市民の健康づくり計画シンポジウム報告書」について、それを家庭という視点からより充実させるための検討を行うこと、それと並行して家庭の健康度や健康度を評価するパラメーターについて研究

すること等が決められた。

また委員の一人から、館山市で肥満児対策に参加した経験から、肥満にも母児関係が関わっていることが判明したとして、このような面からも研究を進めたいとの意見が出された。

次回は11月19日(月)午後6時より。

委員は以下のとおり。(敬称略)

小林 登(委員長)	有馬弘毅	梅沢 勉
江川 充	小此木啓吾	小島謙四郎
小玉香津子	永井 宏	長畑正道
山岸 敦	横田俊一郎	

第1回医薬問題研究会

8月31日(金)午後3時より5時迄、研究所会議室において第1回医薬問題研究会が開催された。

会議のメンバーは、

粕谷 豊	星薬科大学学長(委員長)
青木 清	上智大学生命科学研究所所長 (生存研常務理事)
須藤辰夫	三共(株)専務取締役

豊川裕之 東邦大学医学部公衆衛生学教室
教授

野口照久 サントリー(株)専務取締役

藤野志朗 中央大学経済学部教授

柳田知司 (財)実験動物中央研究所附属前臨
床医学研究所所長

山田裕久 武田薬品工業(株)専務取締役

財団側から

熊谷 洋 生存研理事長

小平 敦 生存研専務理事

田村貞雄 生存研常務理事

小林芳子 生存研事務局

今回は向山定孝研究所顧問も参加された。

* * * *

会議は、先ず粕谷委員長からこれまでの準備委員会での検討をふまえて、以下のようにこれからこの研究会で検討すべき問題につき意見が述べられた。

「人類のよりよい生存のための医薬のあり方を求めて、どのような価値観の下に、どのような手法でそれを評価すべきか。科学的、定量的比較評価の手法の開発とその精度の向上、薬のリスクの調査と記録、コスト・ベネフィット分析、Quality of Life、産業政策的視野からのあり方、医薬品の価値の位置付け、必要でいながら開発されていない薬の開発促進、疾病構造の変化に対応する医薬品の開発、

疾病についての基本的・多面的研究を強化する研究所の必要、健やかな人生を全うするための医薬品のあり方、等が検討されるべきである。生命の質には個人的、主観的面があり、それを取り込んだ医薬品開発のあり方を論ずるのはむつかしいが、それを考えたい。日本の現状は人類の生存からは偏っていないか。包括医療、地域医療のなかでの医薬品のあるべき姿と、そのなかでの効率的な使い方が討議されるべきである。」と。

ついで、柳田委員から、「高齢化社会でのQuality of Lifeの維持が求められる。医薬は当面病気の治療・予防という医学のなかで使われるが、現在の問題が解決されたあとは人生の生きがい保持のための役割がでてくるのではないか。その際、経済性、倫理性に問題がある。医療費と同じで、これからどこまで認められるのであろうか。人間社会にとって薬はどういう存在意義があるのか、その見通しを立てることもこの研究会の役割の一つであろう。公開講演会などで社会一般人の認識とのコミュニケーションを保つ必要がある。」というような意見がだされた。

そのあと出席者全員により時間一杯活発な討論が行われた。

次回は11月5日(月)午後3時から5時迄。意見発表者は豊川委員の予定。

第2回メディコエコノミックス研究会 医療の質と価値付け

10月2日(火)午後3時30分より研究所会議室において第2回メディコエコノミックス研究会が開催された。今回の発表者は左奈田幸夫委員、テーマは「医療の質と価値付け」。左奈田委員は、医療の質に立ち入ると価値の問

題にはいらざるを得ないとしながら、医療サービス、医療費の概念、医療経済学(医療学の定義からメディコエコノミックス迄)臨床経済学、価値と価格、医療報酬と技術報酬、医療におけるニーズと需要、医師の最善の手

腕、医療技術評価等につき定義付けと理論化を試み、それらが抱える問題点を指摘するとともに、米国における「管理医療の質と価値カンファレンス」に見られるようなユティリティ・オンリーの見方の限界を指摘し、医

師の意志決定過程に資源やサポートシステムが影響を与える、また現在医師の手腕が報酬に反映されていないとした。

今回は11月20日(火)午後3時より、左奈田委員による今回の続き。

●生存科学研究所 福岡講演会

『激変する産業社会と地域・住民の健康政策』

10月28日(日)午後1時30分より福岡市の福岡県医師会館大講堂において、生存科学研究所主催、福岡県医師会共催の表記テーマによる講演会が開催された。

この講演会の開催主旨は以下のとおり。

我々人類は、家庭を拠点として地域特性を背景に地域住民という集団を形成しており、健康福祉の具体的実現もそれを基盤にしてでなくては出来ない。しかし同時に、現代の科学技術の進歩、人口の増大や高齢化、そしてこれ等と切り放せない関係にある産業化、情報化、グローバル化、それに伴う政治経済体制の新しい展開という、社会環境の激変のなかにおいては、そのなかでの実践を考えなければならぬ。

我が国の最も由緒ある重要な産業社会の発祥地福岡県において、新しい状況と条件下での健康福祉社会を目指して、産業社会と地域社会の総合的なシステムを求め、地域住民の積極的合意と協力関係を構築しうる生存の手法を開発し実践することを、地域の方々と一緒に考えやってみたい。

詳細は研究誌『生存科学』に譲るとして、講演会のプログラムは以下のとおり。

* * * *

開会の辞 桜井日出生福岡県医師会会長
挨拶 熊谷洋生存研理事長

開催に当たって 小平敦生存研専務理事
第1セッション：産業社会における環境投資
と健康投資

講師 向山定孝三井業際研究所常任委員
特別発言 津田恵北九州市医師会会長
コメンテーター 田村貞雄早稲田大学教授
第2セッション：福岡県における産業社会の

動向と産業医学・産業医の役割

講師 土屋健三郎産業医科大学学長
特別発言 桜井日出生福岡県医師会会長
コメンテーター 鈴木雪夫東京大学名誉教授
第3セッション：地域・住民の健康のあり方
とプライマリケアの組織的展開

—地域包括医療システムとの関連において—
講師 山口正民日本プライマリケア学会会長
特別発言 石川秀雄宗像医師会会長
コメンテーター 梅園忠千葉県医師会理事
第4セッション：産業社会の将来と生存のあ

り方

講師 筑井甚吉大阪大学名誉教授
特別発言 大久保修吉前大牟田市医師会会長
コメンテーター 吉川暉大分市医師会立
アルメイダ病院院長
質疑応答 司会土屋健三郎産業医科大学学長
むすびの言葉 小平敦生存研専務理事
閉会の辞 永田恒久福岡県医師会副会長

第4回武見国際保健シンポジウムを終わって

産業医科大学長 土屋 健三郎

9月29、30日、武見国際保健シンポジウムがボストンにおいて開催された。本シンポジウムの開催にあたって、我が国からの組織委員として当産業医科大学環境疫学教室大久保利晃教授と小生が約一年半にわたり計画に参画してきた。

今回の題は「第3世界における労働人口と保健——その問題と政策——」ということで、第1日目に小生が基調講演「武見太郎と産業医学」を行った。今回のシンポジウムは次の4つのセッションに分かれ、主として過去の武見フェローによる熱心な討論が繰り広げられた。

- 1 産業医学問題に対する展望
- 2 産業医学政策の分析
- 3 産業保健政策についての各国の対応
- 4 国際的な対応

我田引水になるが、先日、組織委員の一人であるハーバード大学の武見プログラム担当のライシュ教授からの小生あての書簡によると小生の基調講演「武見太郎と産業医学」が

武見プログラムのより広い文脈にとって特に重要であり、かつ、今後の生存科学研究所との協力にとっても大変興味あるものとの感想をいただいた。

発展途上国における産業医学の問題点を明らかにし、今後の政策決定について議論した今回の武見シンポジウムにおいて、これらの国々及び国際的な視野にたつて多数の武見フェローからの発表がなされ、討論されたことは大変意義深いものであったと考える。

本シンポジウムの開催にあたり今更いいうまでもないが、武見太郎先生が二十数年前から御逝去されるまでの間、随所で熱心に説かれていた産業医学の重要性をまとめることは小生にとっても非常に大変な作業であった。

なお、最後に武見先生が生前、今後の医師はその専門性の如何に関わらず全て産業医学を勉強する必要があること、また、現在、特に問題となっているメンタルヘルス、健康増進、環境保全の重要性を強調されておられたことを紹介しておきたい。

武見フェローのボストン便り(第1報)

津谷喜一郎, 1990/91武見フェロー

津谷氏の武見フェローのボストン便りの第一報をここに掲載する。第2報以降は研究誌「生存科学」の方に掲載予定している。第5回武見国際シンポジウムを武見フェローを中心とした研究発表・推進の場として準備している生存科学研究所としては、会員諸兄へ関連する情報を早く伝えるべきであると考え、今回はニュースでお伝えすることとした。

* * * *

この項は従来ハーバード大学公衆衛生学大学院武見国際保健講座の活動の一部である、武見リサーチセミナーや武見フォーラムの題目をリストしてきたが、武見フェローとして感じたことや、考えたことなども軽くふれた方が読者にも読みやすく、また武見プログラムと生存科学研究所関係者の相互理解にもな

ろうと考え、いくらかスタイルを変えたものとした。

私は8月下旬に家族とともにボストンにつき、8月27日から2週間にわたってひらかれたAdvanced Seminar Programにまず参加した。これは公衆衛生学大学院が新入生にたいして数年前から行っているオリエンテーションのためのプログラムで、講義の方法、図書館の使い方、コンピュータの入門コース、ボストン生活案内などからなりなかなかによくなったプログラムである。海外からきた学生に対する精神衛生対策としての説明のうちに、留学生のとり一般的な精神状態のコースとして、やっときたボストンにたいするハネムーン期、アメリカ文化に対する不適應期、その後に来る安定期というのがあったが、私の専門の臨床薬理学でいう薬が世に出たときの反応によく似ているのには興味を覚えた。

公衆衛生学大学院としては、学生として、今年は266名の修士課程 (Master of Public healthとMaster of Scienceあわせて) と78名の博士課程、さらに研究を主体にする武見フェローのようなりサーチフェローの3つのカテゴリーがあることになる。全部で約50カ

国からの学生や研究者がおり、ハーバード大学の中でももっとも国際的な学部・大学院の一つである。私は5年程、WHOで勤務している間、国の呼び方に注意を払うよう訓練を受け、台湾や香港が入っているときは、国なしエリアと呼んでいたが、ハーバード大学ではそれ程厳密ではなく台湾も含めて国の数を数えている。なおKoreaというと韓国のことを指す。

さて、今年は武見フェローは全部で8人で、出身国籍と資金援助元を見てみると、インド2名 (International Health Policy Program)、インドネシア1名 (U.S. Agency for International Development)、マラウイ1名 (カーネギー財団)、ウガンダ1名 (カーネギー財団)、南アフリカ1名 (カーネギー財団)、フランス1名 (私費)、日本1名 (生存科学研究所) となる。

来たる1992年の第5回武見国際シンポジウムは、今までの武見フェロー全体のre-unionという性格をもつ。この準備委員会もすでに発足している。参考までにいままでの武見フェローの地域別・出身国別の表を下に示す。

	第1期 84/85	第2期 85/86	第3期 86/87	第4期 87/88	第5期 88/89	第6期 89/90	第7期 90/91	計
アフリカ	—	1 (スーダン)	—	2 (タンザニア 南アフリカ)	2 (ナイジェリア ザイール)	2 (ケニア ナイジェリア)	3 (マウライ、ウガンダ 南アフリカ)	10
南北アメリカ	—	1 (コロンビア)	1 (アメリカ)	1 (コロンビア)	—	1 (ニカラグア)	—	4
ヨーロッパ	—	1 (ベルギー)	—	1 (デンマーク)	—	—	1 (フランス)	3
中近東	—	1 (イスラエル)	—	—	—	—	—	1
南アジア	2 (インドネシア)	1 (スリランカ)	—	3 (インド×2 パキスタン)	1 (インド)	2 (インドネシア)	2 (インド×2)	11
東アジア	2 (中国)	—	3 (中国、タイ 台湾)	—	4 (中国×2、フィリピン マレーシア)	1 (韓国)	1 (インドネシア)	10
日本	1	1	1	1	1	1	1	7
計	5	6	5	8	8	7	8	47

年度によって、地域・国の分布は様々である。アフリカからのフェローが近年多くなっている。1番多いのはインドで7名、基本的には途上国からのフェローのためのプログラムであるが、ヨーロッパからの参加もあり、また、日本はもともとこのプログラムが故武見氏との関係で始まったことから毎年一人選ばれており、インドと同じく計7名となる。日本から特別に毎年1人参加しているのに気づき、このプログラムと生存科学研究所とのbridgeの役をになうのも日本からのフェローの仕事の一部かと思ったのもこの項を書く動機のひとつである。なお、今までのフェローの中には米国に留まって研究を続けている者や、WHOなどの国際機関で勤務している者もあり、現在の連絡先の国名はいささか異なるものとなっている。

現在の武見プログラムのスタッフは、Michael Reich (director), Diana Weil (assistant director), Monica Munson (assistant to the director) の3人で、これに1日何時間か来る高校生のアルバイトが1人いる、武見プログラムは公衆衛生学大学院のDepartment of Population Scienceに所属しており、ここのChairmanがLincoln Chenで、彼はTaro Takemi Professorという故武見氏の名を戴く冠教授である。

こちらの学期に合わせて、一応9月13日から武見講座の活動が始まった。例年通りとのことであるが、フェロー全員がまだ揃っていないわけではなく、現在6人がおり、全員揃うのは10月中旬ということになる。各人2人部屋を割り当てられる。部屋の大きさは人がひしめく医学部の臨床系の教室からきた者には広いが、人の余りいない基礎系の研究室から

きた者にとっては狭いという広さである。ちなみに私は臨床薬理学というまだ新しい分野で人のそう多くないところからきたので狭く感じられる。

こちらへついて気がついたことの一つに、武見プログラムと生存科学研究所の間の情報交換がいささか不足していることで、例えば、武見プログラムの年報は1983年から毎年発行されているが、私はこれを日本でみる機会がなかった。Department of Population Scienceのここ数年の年報や、武見フェローが聴講することの多い公衆衛生学部の講座案内、第6期までの全39名の武見フェローとしての論文などとともに生存科学研究所の書架に配置し、武見フェローの応募者や選考決定者に閲覧・貸出、さらに広く生存科学研究所関係者にも閲覧できるような体制を、銀座の事務所と連絡を取り合って手配した。

また、公衆衛生学大学院だけでも10人以上の日本人がいるが、彼らも生存科学研究所の何たるかを知らない。そこでこのニュースを30部ほど送ってもらい、武見プログラムのdirectorと日本からの武見フェローに各1部、1部は武見プログラムの会議室の書架に配置し、残りはこのプログラムを訪れる多くの訪問者が自由に持ち帰れるようにした。日本人のみならず、外国人で日本語を理解する者も近年多く、また中国系の人で漢字だけを拾い読みして中身を理解する人もいるので、いくらかは日本での活動を紹介するのに役立つであろう。

私はハネムーン期はほとんど感じず、すでに不適應期にはいっており、おまけにハーバード大学の医学系のキャンパスは現在大きな地下駐車場を作るのであっちこち掘り返

してひどく埃っぽく、いまいち調子が出ないと
といった状況です。

9月までの武見プログラムの活動状況は以
下の通りです。

ハーバード大学武見講座活動報告

<武見リサーチセミナー>

9月17日 “Ten Years After Alma Ata : Balancing Different Primary Health Care Strategies”/Lincoln Chen

「アルマアータ宣言10年後：種々のプライマリヘルスケア戦略」

9月24日 “Legal and Policy Aspects of AIDS Interventions”/Harvey Fineberg

「AIDS対策の法的・政治的側面」

<武見シンポジウム>

9月30日 4th Takemi Symposium on International Health : “Working Populations and Health; Problems and Policies”

10月1日 第4回武見国際シンポジウム：「労働人口と保健；問題点と政策」

平成2年度 第1回 総合調整委員会

8月23日(木)午後2時より、熊谷財団理事長兼基金運営委員長を議長として、平成2年度第1回総合調整委員会が開催された。

この委員会は昭和63年7月16日の第1回基本方針委員会と同じく、財団・基金の両組織の運営責任者の合意形成のためのもので、現在はこの名称で行われる。

会議では、第1回基本方針委員会での合意事項のその後の経緯と今回の問題点が重点的に協議された。

ハーバード大学との協同事業に関しては、財団の自主体制確立後も尚一部に誤解が残っているため、ハーバード大学との合意書の要点が再度説明された。

合意書の文章からの引用を用いて説明すると、財団は武見博士の哲理を地球的基盤のもとに実現発展せしめる目的で、日本に設立さ

れた公益法人であり、ハーバード大学公衆衛生大学院国際保健武見記念講座の中心テーマは、「武見博士の理念を反映したもので、その焦点はこれを異国間の多様な変遷に如何に適用していくかにある」ので、ハーバード大学はその哲理に関し、研究所から助言と提言、勧告、カリキュラムの題材を期待し歓迎している。

なお、基金と財団は設立主旨を全く同じくし、ただ、その主要研究の重点を、基金は博士の哲理と博士に直接関連性の強い研究事業に、財団は、より広くその理法の社会展開と実践的研究に重点を置き、それぞれの深化と総合を計るものである。

このように、同大学と財団との合意書における財団と基金の基本的関係が説明され、財団は当初から、基金とともに武見哲理の研究

と発展、実践を行う為に設立されたものであり、その際、国際的、地球規模的発展のための一つの有力なパートナーとしてハーバード大学と共にその目的を達せんとするもので、ハーバード大学と協同事業を行うために財団を作ったのではないということが確認された。また、この協同事業のこれまでの5年間の経緯が説明され、それをふまえさらにこれからの5年間の計画と、武見フェロー・ネットワークによる活動推進等を含む提言が協議された。

ハーバード大学との合意書は、契約時から10年後には双方の事前の合意のないかぎり自動消滅するというものなので、ハーバード大学との折衝も慎重を要すると同時に、研究所の強力な自主研究体制の確立が研究所にとって極めて重要な課題となる。

当日の協議結果は、財団としては、9月22日(土)午前11時より行われた第3回常務理事会において報告され承認された。

●第1回生存科学研究所シンポジウム

『生存科学における発展』 予 報

前号でもお知らせした、第1回生存科学研究所シンポジウム『生存科学における発展』のプログラムが以下のように決定された。

日時：1991年(平成3年)1月20日(日)

午前10時～午後5時30分

場所：上智大学10号講堂

東京都千代田区紀尾井町

(JR中央線四ツ谷駅下車徒歩4分、

地下鉄丸の内線四ツ谷駅下車)

I. 特別講演(午前10時～12時)

(1) 生命科学の将来像(仮題)

渡辺格先生

(2) 宗教と生存科学(仮題)

柳瀬睦男先生

II. 総会(正午～午後0時15分)

III. 分科会(午後1時30分～3時30分)

(1) 生存の哲理 まとめ役 藤川正信先生

(2) 健康と家庭 同 小林登先生

(3) 医薬問題 同 粕谷豊先生

(4) 産業環境と生存 同 向山定孝先生

(維持会員は各分科会に分かれ討論参加)

IV. 総合討論

(全員参加)

* * * *

なお、分科会は維持会員・研究会会員の発言の場であり、会員諸兄の日頃の研究の発表が期待されている。発表希望は当日でもよいが事前にテーマならびに発表希望分科会名を申し込んで下さい。

(連絡先(財)生存科学研究所)

維持会員全員参加されることを希望します。

(維持会員入場無料)

第54回生存科学研究会のお知らせ

日時 平成2年11月17日

午後2時より4時30分迄

場所 大手町 経団連会館

演題 「いのちを考える——仏教と医療の接点」

講師 大正大学教授 藤井 正雄

生存科学研究ニュース 配布についてのお知らせ

これまで研究所維持会員以外の方へもかなり幅広くニュースを配布して参りましたが、今回限りとし、前回のニュースでもお知らせしましたように、研究誌『生存科学』の発刊を期に、次号からニュースの配布先を維持会員（生存科学研究会会員）に絞らせていただきます。

維持会員以外の皆様方には、長いことご愛読頂き有り難う御座居ました。いささか押し付けがましくはありましたが、「生存科学」の

目指すところを、また、生存科学研究所の一同が考えておりますところを少しでも多くの方々にお解かり頂きたく思って致した次第でありますので、ご容赦ください。

今後維持会員として研究にご参加下さりたくお思いの方で、まだ維持会員お申し込みをなされなかった方は、お電話でも結構ですからその旨研究所までお申し越してください。

(電話：03-563-3518)

お詫びと訂正のお願い

ニュース前号(Vol.5, No.5)の第7ページ組織運営概念図の最上段、基金フレーム上段のマス4個の内右から二つ目のマス内「生存科学研究会」とあるのは誤りでした。「生存科学研究会」は、その下段の基金・財団両フ

レームに入る大きなマス内のそれが正しいものであります。編集者の不手際をお詫び申し上げ、最上段のものを「研究企画委員会」とご訂正下さいますようお願いいたします。(編集者)

維持会員だより

維持会員異動

入会

・個人

上田 武 旭化成工業株式会社

伊藤元明 イトホテルミー親友会

坂上正道

丸地信弘

小林康毅

・法人

退会

北里大学病院

信州大学医学部

帝京大学医学部

なし

なし

研究所日報

9月13日 第5回武見国際シンポジウム準備委員会(第3回)

9月22日 第3回常務理事会
同 第53回生存科学研究会

9月29日より10月1日まで
第4回武見国際シンポジウム
(ボストン)

10月2日 第2回メディコエコノミックス研究会

10月14日 北上川プロジェクト
現地(盛岡)準備会

10月28日 生存科学研究所 福岡講演会